

# 響

# 流



阿弥陀堂御修復に伴い、ご本尊動座式 御動座列 2011.11.29 (撮影住職)

西光寺通信『響流』 第72号  
発行日 2012(平成24)年1月1日  
発行者 真宗大谷派(本山/京都・東本願寺)  
西光寺 住職 藤石哲朗(法名釋徹舟)  
〒110-0015 東京都台東区東上野 6-15-6  
Tel. 03-3841-3229  
Fax 03-5828-4495  
E-Mail saikoji@xvh.biglobe.ne.jp

## 修正会のご案内

新年の行事「しゅしょうえ」を例年どおり開催します。2011年に身内で亡くなられた方がおられるご家庭の方も、ご本尊、お墓にお参りすることが大切です。積極的にご参加ください。

1月1日 午前11時から  
正信偈のお勤め、住職の法話のあと、  
簡単なおせちを用意しています。

# 我 照 常

## 住職のつぶやき

2011年はいろいろな意味で様々な事を考えさせられた一年でした。特に3月11日以降、これまでこれでいいのか？と薄々思っていた事が露わになったというか、大事なことに気づいたということがあったのではないかと思います。それは現代の社会を覆っている人間知性が内包している闇ということ。そういう知性、知識をもって自然の原理を人間が理解し、人間の技術でコントロールすることができると突き進んできた。しかし、3・11は現実からそのことの無明さが鋭く問われてきたことだったと受けとめています。自然を侮る傲慢さに気づく事のできないという構造を人間知は抱えていると言っているのではないのでしょうか。

しかし、これらは、私たちもその一端を「快適な生活」をおくるため、意識しないままであつてもシステムのひとつとして支えてきたのも事実で、東電や政府をただ批判すればいいという問題ではありません。親鸞聖人750回御遠忌の前日にあのような事が起り、法要テーマである「今、いのちが あなたを生きている」は根源的な問いとしてあらためて立ち現れたのではないのでしょうか。

御遠忌の記念事業等で、いわゆる宗門外の方々からお話しを聞く機会が多くありました。その中で印象に残ったことは、「専門家」といわれる人の前で思考停止になり、私たちの生活する中で行なう事は財布の開け閉めだけになってしまった、という事です。これは、いつもお配りしている宗派の機関紙である『同朋新聞』に紹介されているのでお読みいただいた方は重複しますが、少しまとめてみます。

たとえば、2011年12月号には、御遠忌テーマ公開講演会（2011年9月25日京都・東本願寺で、予定されていた日程より半年後に行なわれた）で「老いといういのちの相<sup>すがた</sup>」というテーマでお話しいただいた前大阪大学学長で哲学者の鷺田清一氏の講演録が掲載されています。そこには、今まで私たちが当たり前に行なってきた生活の中の出来事の多くを、行政やサービス業に依存してきてしまったと、現代社会で老いが「問題」として語られてしまう理由の一つとして挙げています。

「誰もが生老病死の問題に直面するのです。出産、子育て、病気の看護、介護、死の看取り、こういいういのちの相を、互いに世話をし合いながら世代から世代に伝えてきた。もっと言えば世話をし合うしかない間柄なのです。いのちに関わる事なのですから。（略）

今はどうでしょうか。そのプロセスを行政やサービス業に任せています。出産は病院で、子育ては保育園、教育は学校、医療は病院、介護は介護施設で、最期の看取りは病院でそして葬儀は葬儀社…。」

(5月の青木新門さんの講演でもあるお医者さんの事が例としてあげられていましたが、本来の意味の看取りではなく、本人の顔を見るでもなくモニターばかりを見て、画面に映るデータの「見取り」に終始しているような医療の現場なっていないでしょうか。現状ではむづかしいけれど大事な点だと思います。)

「つまり、命に関わる大事な事は、素人がやるとあぶないとか、いのちの世話の安心度、安全度、衛生度が高まるようにと、近代社会ではいのちの世話の大半を行政が引き受けるという方針に変えたのです。

行政は税金を取って、それが担えない部分は免許を与えたサービス業の人們がサービス料を取って、それを代行する制度に変えてきたのです。そのおかげで安心・安全な社会になった訳ですが、一方では地域や家族で担っていた、お互いのいのちの世話をし合うということがほとんどの人ができなくなりました。安心・安全のために行政とサービス業にいのちの世話を委ねるようになった。気がつく自分たちで互いのいのちのケアをし合う能力を失って、自分では何もできなくなっているのです。」と社会はだんだんと成熟していくと、

「いのがどうだろうか、むしろ人間はどんどん弱くなっているのではないだろうかと言われます。

そしてその結果、多くの怪物が現れました。クレーマーと言われる存在です。サービスが劣化したときにこうしたらいいという提案もで



まず、自分たちで引き取るという事もできないという受け身な生き方になってしまい、いのちの世話はすべてやってもらうという形だから、それが不十分だと文句を付けるクレーマーばかりが増えているのが現代社会の特徴だと指摘しています。

また、心理学研究者の小沢牧子氏も同じく2010年9月・10月号で

「自分の手を汚さず、なるべく人に委ねる。「苦」や「不快」があってはならないという考え方に私たちはなじんでしまった。嫌な事、病や悩みも専門家に委ねて上手に解決してもらいたい。すると情報化社会ですから「どの病院がいいか、どのカウンセラーか、どの葬儀社が安いか」というような生活になっている。そのことが根本的な問題としてあります。そのためにまさに暮らしが貧困化していると思います」と述べています。

教育も福祉も、老いも死も、あらゆるものが商品化した高度消費社会で残っていたのが、「心」だったのです。心の商品化に伴って心理学が流行り、悩みを取り扱う「専門家」がたくさん生み出されました。カウンセリングの普及が人と人とのつながりを弱め、悩んだり耐えたりする力を奪い、「個」へのサービスに依存する風潮がますます進行していきました。

「阪神淡路大震災のとき「心のケア」という言葉がいきなり流行ったことを覚えていらっしゃいますか？カウンセラーが大挙被災地に派遣されました

が、それを私は不自然に感じていました。関東大震災のときはどうだったか、明治生まれの母に聞くと、みんな広場でコン口を持ち寄って、一緒に食べるものを一生懸命作っていたといいました。みんなが被害を受けて苦しいときは、助け合う、励まし合って一緒に動く、そういうことが普段の生活場面で何より大事だと。自分だけじゃない、みんなも同じだから一緒にという行為が私たちのパワーと先への希望を生むと思うのです。」と「心の専門家」に丸投げするようなあり方は不自然であり、見当違いだとはつきりと言われます。

日常生活を生きるという事は時に生々しい問題にぶつからざるをえませんが、何も問題が起らない生活などないからです。しかし、今は耐性がなく、そういったことから目をそらして、お金で癒しを求めるといふ風潮が急速に蔓延してきました。たとえば、心理学、精神世界、宗教（カルト）、カルチャーセンター的ワークショップと、次から次へと依存対象を遍歴する人が増えているそうです。

「迷いとか苦悩を避けて、何か困った事が起ったら専門家に処理してもらおうという、財布の開け閉めだけの暮らしになってしまっています。それはいのちを生きるということがなくなっていくことであり、苦悩というのは、生活の中で絶えず起り、それは人の関係を作っていく為の大事な契機でもあるのですが、「心のケア」というのは管理の発想ですからそれを封じ込めてしまう事になるのです。」

いのちを生きるということ  
は問題が起きない事、おきても動揺を鎮めるノウハウではないのだと言います。

結局私たちは個人が自立

して自由に自分らしく生きていく事はすばらしい事で、それができると思いこんできたのかもしれませんが、しかし、「人」という字がそうであるように一人で生きているのではないのだという道理を忘れ去って、「自己責任」の大合唱が聞こえる時代になってしまいました。しかし、地縁・血縁といったコミュニティ（共同体）は崩れ、高度経済成長の中では 一時期、疑似共同体として企業が担っていた時期もありましたが、グローバル化の中で、非正規労働が増える中、会社も疑似共同体を支える余力が奪われ、とつくに崩壊しています。そうになると、個人が社会に放り出された状況にあり、そこから、かえっていよいよ何かに依存したくなっていくのではないのでしょうか。「依存」ということが大きな問題になっていて、何かに「依存」していくことで、自分でものを考えていく事が失われてきているように思えてなりません。

これまでも24時間煌煌と電気をつけてコンビニが開いていなくても、正月から買い物できなくてもいいじゃないか疑問を持っていた



人はいたと思います。経済成長を止めるのかと言われればそれはおかしいといえない空気があったことはたしかで、今更仕方がない、と圧倒的なお金の力に屈つせざるをえなくなってしまったのでしよう。国策として原発をつくり、温暖化対策もやらなければ異常気象とかもいわれてるしとか、石油や天然ガス水力よりも安く発電できるようだし、風頼みの風力や太陽光なんて当てにできないと専門家は言ってるし。また、地元で産業がないところに作るんだから地元もお金がもたらえるんだし、詳しい事はわかんないけど、東大出た優秀な人たちが大丈夫だといってるんだからと、「専門家」に委ねて、波風を立てずうまく物事を運んでもらいたい気持ちが強くなって、「ちょっと待てよ」といえないような、そして自分にとって「不快」ではない社会にするのが幸せな事なのだと疑問を持たず、「クリーン」な電気をボタン一つでふんだんに使うような生活に絡めとられていたのが、3月11日までのことだったのではないのでしょうか。

排気ガスを減らして「クリーンな電気」で走るハイブリット車が減税政策で売れているようですが、その「クリーンな電気」は福島の、敦賀の、御前崎の、玄海の、その他多くの地域の犠牲の上に、私たちが享受する為に生み出され、その後処理の方法がないままに生み出され続けてきたものなのだという事によく気づきはじめてののだと思います。

人間の自力によってすべてを統御する事ができる、という考えを疑ったのが親鸞です。自力によってすべて成し遂げるといふ思いは、人の有限性を自覚できなくさせる事になります。

私たちは、合理性や利便性を最優先に、常に進歩する事に何の疑念を抱かずに暮らしてきました。その中で専門的な事は『専門家』に委ねるといふ事に馴れてしまっているので、原発の問題も専門家が安全に管理されていると言えば、疑いを持つといふ事ができない生き方になってしまっていたことが明らかになつたと思います。

葬儀の現場でも葬儀自体が「迷惑なもの」「面倒くさいもの」という受け止め方しかできないからか「手間をかけずに速やかに」と、口の悪いある方の表現を借りれば、「まるで、生ゴミの処理をするかのような」葬儀の有様になつていないでしょうか。私は御門徒がお亡くなりになつたというお知らせがあると、必ず枕勤め（枕経）に伺うのですが、それを裏付けるように近年、ご自宅で枕勤めをされるというお宅が急速に減少してきました。物理的にご遺体を運べないという事情がある場合もありますが、多くがその方が生活をされてきたお家に帰るのではなく、効率や都合が優先され葬儀社等の「冷凍庫」です。また、枕勤めの場に家族が同席しないという、これまで考えられない事も実際にありました。

町会の副会長をされている門徒さんから、今、親子が別に住む状況が殆どだからか、町会へのお葬儀の知らせはしないでくれという方が急増していると聞きました。葬儀屋さんにも聞いても「家族葬」が増えているそうです。家族は勿論大切ですが、人は同時に社会的存在でもあります。私自身の経験でも、父の友人からお通夜の晩に、家族も知らない父の若い頃仏教に出会ったときの話を初めて聞く事ができました。その人の人生を家族内だけに閉じ込めてしまうことで果たして良いのか考えさせられました。「本人も迷惑をかけるから家族だけで」と言い残していましたので「と異口同音に言われるケースが多いそうです。皆、何に遠慮している(させられている?)のでしょうか。身近な方々による、死を縁とし、自身のあり方を心静かに刻み込むといった本来の意味での「家族葬」ならいいのですが…。



かけがえない一人一人のいのちが終わっていく事を「迷惑なこと」にしてしまっていないのでしょうか。私の存在が既に多くの生き物・自然に対して迷惑をかけているという事は忘れていないだろうか。遠藤周作氏は「生きるという事は人様の前を平気で横切るような事だ」と自らを深くみつめていた事を思い出します。

老人というのは迷惑な存在だという社会は日本だけだという方もいわれます。自分は、最期まで何でもやろうと思った事はできる存在

なんだと思つていられるのでしょうか。だから「できない奴は努力が足らなかつたんだから自己責任じゃん」と切り捨てるような事が言えるんじゃないでしょうか。「心がけ」や「努力」は勿論大事です。が、思えば何でもやれるということは思い上がりでしょう。努力すれば実現するというのは人間の思いです。実現したのは勿論努力したからでありましようが、努力できる環境が、条件がたまたま与えられたという事がなければ無理な話でしょうし、それこそ縁が熟してというのが真実ではないでしょうか。その思いにからめとられて最後に人生そのものが破綻したという悲惨な話もあります。

話を戻しますと、なぜご遺体を前にして集まる事が大事かというと、「死」から教えられることが理屈を超えて迫ってくるからです。ご遺体を自宅で囲んでみんながあつまる。そこに場の豊かさが生まれるのですが、商品化・簡略化が進むと、人生を刻んできた方を送る場がとて薄れてしまい、「死」をみつめる機会がなくなりつつあるのを強く感じます。

その反面、「個を重視する」考え方が強まりました。「自己責任」という言い方で孤立させられた個として社会に投げだされた状況です。小沢さんは続けて、「個を尊重する考え方は否定できないけれど、そのことで失ってきたものは非常に大きいと思います。失ったものはやはり安心感なんです。みんなと一緒に生きている。自分のようでありながら、自分ではないという感覚。老いるというのは「めぐり」を重ねていくということ

なんです。そのめぐりの節目の一つは正月だったのです。正月にみんないっしょに年をとっていたのですね。みんなで生きている、そのめぐりを共有する。それは一つの安心感でした。この頃は個人の誕生日は祝います。「個」が強調される時代とともに「みんな」から「個人」へと変化したのです。

そして、死にあたつても「自分らしさ」という呪縛から逃れられず、自ら死にゆく「いのち」として誕生してきたのだという事実を引き受けていく事が難しくなっているの



ではないでしょうか。死すらも私有化していつてしまいます。

「死というのは遺された人たちのものなんだと思います。遺された者が、死を悼み、悲しみ、後のことを考え合う。自分が死んだらこうしてほしいとか、自分の弔い方を設計するのはわびしいし、個人主義の発想だと思います。」

そして、仏教の、あらゆるものは縁起的な存在であるということが生活の中から排除されてきた事によって、すべて関係存在によって成り立っているのだという、つまり、何一つ欠けても自分ではないのだという道理、真実が見えなくなってしまうのでしよう。

「死を自分のものとするのも、個に毒されているからでしょう。老いもそうです。老後の心配をするのも無理からぬことですが、老いて動けなくなった判断ができなくなるのはやむをえないのです。老いて病んでというときに、もしもの時はこうしてください」と自己決定するのは立派ですが、辛いと

も思う。そうではなくて、「どんなふうになるかわかんないけれど、順繰りだからよろしくね」でいいと思うのです。

お葬式は言い方は悪いが故人をだしにみんなが集まるのです。久しぶりの再会もあるでしょうし、仲違いしていた人同士が、いいかげん「いつまでも」と新しい関係が生まれる場合もあるし、自分の死を受けとめることもあるでしょう。人の死は、遺された者を豊かにつなげる契機をもつ。そういう意味でも、死はその人のものではなくて、むしろ遺された人たちのものなんですね。」

と語っておられます。

人は生きる場を失うと存在の根源を喪失し、自分を支える事ができなくなりまます。今回の地震や原発事故でも多くの人が生きる場所を喪失しました。しかし、生きる場が崩れていくのは地震や事故だけではなくありません。愛しい人とのわかれという問題もそうです。生きる場の喪失(死)から死者との新たな出遇いが生まれ、その死者の眼から問われるという事があり、宗教にとつても重要な事であると思えます。

仏教にとつて出発点は苦です。苦悩の身に教えが響いてくるのでしよう。しかし、死んだら浄土に往生できるとか、地獄だとかいう実体化した議論ではありません。死を意識しない宗教はありませんが、死で完結させるような答えを用意している教えは危ないと思います。どこまでも業縁存在として罪深い人間だということがあるから歩みは

終わらないでしょう。出発点を与えられて歩むのです。答えを求め  
るのではなく、問いをいただくのだと教えられます。私という主体を  
どう引き受けて歩んでゆくのか、そこから今という事を譲かさせていた  
だくということではないでしょうか。

# 『報生口』

★震災の直後からみな様に救援金をお願いして参りました。4月13  
日までの合計50,481円の救援金をいただき、その内40,48  
1円を本山を通じて被災地に、浅草仏教会を通じて1万円をそれぞれ  
送りました。

また、東京教区も一都六県長野山梨が行政区ですので、特に北関東  
では甚大な被害が出また被災教区として認定され、宗派から見舞金が  
教区に支給されました。被害の程度で違いますが、東京は一律割りで  
35,000円と決定し西光寺もいただきました。しかし、その分は  
東北の被災地に役立てようと、その後皆様からいただいた救援金と合  
わせた57,150円を「真宗大谷派東京教区災害ボランティア支援  
口座」に送りました。

ボランティアの僧侶たちは毎週手弁当で駆けつけて物資の調達に  
も苦労されています。義援金はそうした影で活動されている方への物  
資購入には支給されません。子どもたちを夏休みに北海道へ一時避難

へ等々長期にわたつての支援となりますので、息の長い支援を目に見  
えるところで役だてていただこうと判断いたしました。今後も募金箱  
をおいていますので、あらためてよろしくご支援くださいますようお  
願いたします。

# お礼

11月3日西光寺報恩講を厳修いたし  
ました。次の方々から報恩講御仏供米志  
をいただきました。厚く御礼申し上げます。

伊藤隆、飯塚幸子、越智徹、杉浦正宣、佐藤美枝子、山口雄司、中島  
四朗、松矢孝次、笹川孝雄、内藤新一、三木昇、福田忠、関谷清吉、  
中西京子、  
松田芳江、山田雪代、黒田恵、森瀬昭子、曾我部喜代子、山下裕三、  
久保田博、福田清、川越慶則、伊與田幸子、田邊一秀、青柿鶴三、奥  
田光子、松浦良江、金森圭子、川越彰範、角田三智子、松浦節子、上  
田晃裕、  
須藤石材店（敬称略・順不同）

**聞法会のお誘い**  
**2012年2月19日（日） 13時〜**



# 西光寺・源隆寺 合同旅行会

会場は西光寺です。多くのご門徒の参加申込をお待ちしています。

201

2(平)

## いのちのふれあいゼミナール

東日本大震災、その後の原発の災害は私たちに生きる事とおしてさまざま問題を投げかけています。「人知の闇」と、「生きる場」の問題はその中でも重大な課題です。

法話のテーマは「帰る命―私はどこに行けばよいのでしょうか」です。「帰る事ができない人々」が生み出された現実の中で、生きる場所というのは、自分が無条件に生きる事ができるところとして成り立っている場のことだと思えます。

帰命せよと呼びかける言葉を、ご一緒に考えたいと思います。(詳細は次ページに掲載)

成24)年11月23(金・祝)日〜25日(日)の二泊三日で本山(京都・東本願寺)の報恩講参拝を中心に団体旅行を計画しています。お手つき寺の源隆寺さまとの合同企画です。

これまでも研修会で本山に参拝したときなど源隆寺さんと西光寺は合同で行動する事が多く、それぞれのご門徒さんとも親しく交流を重ねて参りました。詳細は、決まり次第お知らせします。寺としての旅行は前任職の時代に2回くらい行なって以来になります。

親鸞聖人の足跡をたどる旅行をテーマを決めて行なおうと話していました。門徒さん同士の懇親もはかりたいと念願しています。

